知事コラム　佐竹敬久のさぁ、やるど！

南米訪問顛末

さる１０月２２日から１１月２日までの１２日間の日程で南米のブラジル、パラグアイ、アルゼンチンを訪問しました。

ブラジル秋田県人会の創立５５周年記念式典とリニューアルとなった県人会館の落成式に参加するとともに、パラグアイ、アルゼンチンの秋田県人会の皆様を訪問する旅です。

団長の私に加え、渋谷県議会議長と県議会議員ご三方、それに秋田市の渡辺市議会議長、鎌田副市長、民間企業の社長さんお二人等、一行１８人の訪問団です。

昭和３５年の小畑知事時代から現在までほぼ５年毎に続けている恒例の訪問事業です。

当時は、飛行機の航続距離も短く途中の経由地に泊まりながらの旅で、記録によれば、なんと４２日間の日程という今では考えられないほどの長旅だったとのことです。

しかし、ブラジルは日本から見れば地球のちょうど反対側、飛行機の航続距離が飛躍的に伸びた現在といえども、最短で機中４泊という旅になります。

ところで、秋田県から南米への移民の歴史は古く、公式記録によれば明治４１年に始まり昭和５８年まで続き、公式記録によればブラジルの３，９８５名、アルゼンチン４３５名、パラグアイ２１８名など総勢４，７５７名となっており、現在では二世、三世、四世と末裔の方々を含めれば県人関係者は１万２千名位になるのではと推測されています。

最初は農業関係の移民が主体で、それこそアマゾン地域に代表される未開のジャングルを切り開き開墾するという想像を絶する苦労をされた方々が多く、猛獣に襲われたり熱病に罹り夢果たせず倒れられた方も多かったとのことです。

しかし、時代が進む中でブラジルとアルゼンチンでは、現在は農業に限らず様々な職業に就いており、ブラジル財界の中核にまでなった方もおりますが、いずれにしてもご苦労された分、皆様の秋田への思いは強く、我々を温かく迎えて頂き大変な歓待を受けました。

特に、郷里秋田の人々が私たちを忘れず定期的に訪問団を送ってくれるのは何よりの幸せと言って涙を滲ませるお年寄りの方のお顔は目に焼き付き、同じ秋田県人として異国での苦労話を、こちらも目を潤ませながらお聞きしました。

ところで、私のパスポートの写真は最も太っていた頃のもので、４年前に体調を崩し今ではその頃より１５キロほどスリムになって、しかも眼鏡をかけるようになっています。

帰途、アルゼンチンからブラジル・サンパウロ空港に到着しての入国審査で、審査官が写真と違い過ぎて別人だろうということで別室へ連行されてしまいました。

上司の人に片言の英語で必死に理由を述べ、なんとか解ってもらい３０分ほどで無事に解放、団員一行、団長が居なくなったということで大騒ぎという、落ちがついた旅でした。

人相があまりに異なったパスポートをお持ちの方はご注意を！